

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	27K17	氏名	村上 聡恵
研究主題 —副主題—	若手教員の授業づくりを支えるコンサルテーションの実践 —ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を目指して—		
所属校	府中市立府中第四小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>1 背景</p> <p>特別な教育的ニーズへの対応が求められる難しい状況にある中で、東京都では経験の少ない若手教員が増えている現状がある。若手教員の授業力の向上は重要な課題となっているといえる。このような状況から、筆者は若手教員の授業づくりを支える取組が必要であると考えに至った。</p> <p>特別支援教育において先進的な取組を行っている自治体では、授業のチェックリストを作成し、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを目指している。さらに、ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を行うためには、教員の指導行動の変化が求められており、教員の指導や授業スキルに対してコンサルテーションを行うことが有効であるとされる。宇野(2013)は、「授業のコンサルテーションは、担任自らが、学級の実情に合わせて、支援や配慮のアイデアを考えて実行するためのものであり、そのためには、実践の省察を通して、その背景にまで理解を深めるダブルループ学習を促進する必要がある」ことを指摘している。そこで、本研究では、F. コルトハーヘン(2010)が確立した省察モデルである、ALACT モデルのサイクルを活用したコンサルテーションを行い、若手教員の省察と授業づくりのサポートを行う。</p> <p>2 目的</p> <p>(1)若手教員のユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの現状を「授業についての自己チェックリスト」を用いて把握する。</p> <p>(2)若手教員と授業のコンサルテーションを行い、授業改善への有効性を検証することを通して、コンサルテーションの望ましい方法について明らかにする。</p>
II 研究の方法	<p>1 質問紙調査</p> <p><調査内容> 「授業についての自己チェックリスト」(神奈川県逗子市)</p> <p>2 授業のコンサルテーションの対象と方法</p> <p><対象> 第1学年 教員経験4年目A教諭、第1学年 教員経験1年目B教諭</p> <p><方法> 若手教員が指導技術の目標を定め、授業を実施する。授業後、筆者と共に、ビデオ撮影された自らの授業を視聴し、省察を行う。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>1 質問紙調査の分析</p> <p>若手教員とそれ以外の教員の自己評価の得点を比較した。若手教員の自己評価得点がそれ以外の教員と比べて低かった項目は、授業の土台作り、授業の構成の項目であった。明らかになった項目に重点を置き、対象の若手教員のニーズに合わせて、授業のコンサルテーションを行うこととした。</p> <p>2 省察場面の発話分析</p> <p>筆者のコンサルテーションにおいて、ファシリテーター的機能として最も多く行われていたのは、「解釈することを促進する問いかけ」であり、また、インストラクター的機能として多く行われていたのは、「授業中の事実の解釈」であることが明らかになった。また、コンサルテーションのサイクルを重ねるにつれて、「一般化することを促進する問いかけ」が増加している傾向が見られた。さらに、若手教員と筆者が省察する場面における発話の具体的な展開の分析では、筆者は若手教員に「解釈を促進する問いかけ」を繰り返し、授業における子供の理解を掘り下げていた。その後、「授業中の事実の解釈」を伝えることによって、「一般化することを促進する問いかけ」につなげていた。この対話によって若手教員は子供の姿から指導技術の重要性に気付き、対応策の改善方法や新たな支援方法を見つけ出すことができた。</p> <p>3 コンサルテーション期間終了後のインタビュー調査の分析</p> <p>本研究で行ったコンサルテーションの取組について、A教諭、B教諭にインタビュー調査を行った結果、ビデオの映像を基に授業の振り返りを行うことは、子供や教員自身の行動や思考を客観的に認識することを促すことが明らかになった。また、子供が授業において何を経験していたのかを考える視点は、若手教員にとってあまり意識されてこなかった視点であり、その問いによって省察が深まることが示唆された。さらに、コンサルテーションは若手教員の特別な教育的ニーズを必要とする子供の見取り方に変容をもたらし、それらの子供を含めた学級全体の指導や支援の充実について、理解を深めることができた。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>授業のコンサルテーションの実践からは、以下の点が明らかになった。</p> <p>第一に、ビデオの映像を見ながら省察を行うことは、若手教員に指導や支援に対するメタ認知を促し、これまでもっていた指導観や子供の見取り方に新しい視点をもたらす。省察によって新しい視点を得ることができた若手教員は、更なる指導や支援の工夫を自ら考え、授業改善へと結び付けることができたと言える。</p> <p>第二に、若手教員の授業改善に向けて効果的なコンサルテーションを行うためには、若手教員との間の良好な関係性が基礎となる。省察を促すためには、若手教員に寄り添い、安心して対話ができる環境を作る必要があると言える。</p> <p>一方で、授業のコンサルテーションは同調的に対話をするのみが求められているのではない。授業改善のためには、若手教員が自らの指導や支援における課題を見出し、その本質的な意味や価値について理解を深めていくことが必要である。若手教員の支援者として、子供の思いやニーズに対する新たな気付きを促し、よりよい指導や支援の工夫に結び付くように、学びを促進する関わりが重要となる。</p>

